



つるがしま里山サポートクラブ 通信

記念第10号
2023. 01. 01
発行者
小澤邦彦
編集者
杉山行汪

太田ヶ谷の森を市民の集う森に

副代表 佐野 英樹

太田ヶ谷の森は、2021年4月開設された鶴ヶ島グリーンパークの中に自然散策エリアとして誕生しました。この森の整備についてはマスタープランが策定中と訊きます。マスタープランに従った森の整備には、つるがしま里山サポートクラブの20年間にわたる活動が大いに役に立つと考えています。

しかし、開設以来2年になろうとしています。市民の皆さんにはあまり知られていないようです。この森が大勢の皆さんに親しまれるようになるにはどうしたら良いのか、高倉うきうき市民の森、五味ヶ谷市民の森、藤金市民の森でのつるがしま里山サポートクラブのこれまでの活動を振り返って、今後の活動のヒントを探してみます。

高倉うきうき市民の森

約8ヘクタールの広さの森ですが、市民に親しまれている森ではありませんでした。飯盛川に捨てられた大量の粗大ごみを大勢の皆さんが協力して処分したことは古い会員には思い出として焼き付いています。

その後、我々が上流と下流の二か所に橋を架け（現在の橋は二代目です）、散策路を整備しました。それを利用して、学童保育の皆さんの協力を得て、クロスカントリー大会を開催しました。また、ホテルの復活にも成功しました。継続して里山体験会を開催してきました。このような活動により高倉市民の森が市民の皆さんに知られるようになったと考えています。

五味ヶ谷市民の森

東市民センターに隣接していること、杉下小学校が近いこと、周りに住宅が多いことなど、活動のしやすい森です。特に、竹林があることから、たけのこパーティー、ソーメン流し、門松教室、竹灯り教室など様々なイベントを開催することが出来たので、近隣の皆さんによく知られた市民の森になりました。

藤金市民の森

大谷川が流れ、竹林があり、住宅が近く、藤小、藤中が近い小さな森で、立地の良い森です。びっしりと生えた背丈を越える竹や笹を、刈り払い機を使い大谷川から圏央道に向かって整備を進めました。この時期は活動会員も少なく、参加者が10人を超えることは無く苦労したことを思い出します。

整備後、里山体験会を継続して開催しました。以前は、藤小の校長名の立ち入り禁止の看板がありましたが、現在では、藤小の校外学習の場になっています。

太田ヶ谷の森

さて、太田ヶ谷の森は、市域の南端にあり、周囲に住宅は無く、南小学校からも直線で約1.5kmあります。野球場、サッカー場があるので、それぞれの関係者にはよく知られた存在になっていることでしょうが、市民の皆さんには広く知られているとは言えないようです。この森に市民の皆さん特に子供たちに来てもらうには工夫が必要だと思います。

森の運営組織 「太田ヶ谷の森グランドワーク」が、地元自治会、地域支えあい協議会、環境団体、行政（都市計画課）で組織され、将来構想や森の運営が検討されていると聞きます。この組織を中心にイベントを仕掛けるのが良いと思います。さらに、単独のイベントではなく、外部の組織の力を借りたいと良いと思います。

例えば、2022年10月には第73回鶴ヶ島市民体育祭「コミュニティスポーツミーティング」がサッカー場を中心に開催されました。体育祭は毎年開催されるのでこれに相乗りしてイベントを森の中で開催してはどうでしょう。

あるいは、少年サッカーや少年野球の大会が開催されると思いますのでそれに合わせてイベントを開催してはどうでしょうか。

「太田ヶ谷の森グランドワーク」を中心にいろいろなイベントを仕掛けることが、太田ヶ谷の森を知っていただく早道になるのではないのでしょうか。その中で、つるがしま里山サポートクラブはこれまでの経験生かして大きな力になりたいと思います。

10月～12月の主な活動

この3か月は新しい取り組みが幾つかありました。その一つは栄小学校五年生に対して五味ヶ谷市民の森で、里山を整備する作業の実演です。その様子は体験談をご覧ください

里山体験会は年に数回実施していますがその他に藤金の森で上広谷子供会にも行いました。

我々の活動の対象を幼児に広げる取り組みの第一歩としてはちの巣保育園の秋祭りに参加し竹細工と縄織いの体験を楽しんで貰いました。写真は園の園外散歩途中での縄織いの体験です。近いうちに園の屋外体験の取り込まれるのを期待しています。

高倉の森と太田ヶ谷の森に流れる小川に蛍の復活活動をしていますアメリカザリガニの繁殖で苦戦しており、この面でも協力者を募ります。

植物の恵みにより生命をつなぐ自然循環の仕組みを体験するために、枯れ葉を集めて堆肥にし畑で育てた里芋と薩摩芋を満喫しました。

市のベンチプロジェクトが始まりまずは材料の老木の伐採開始です。今年も門松教室は即満員の盛況です。



10月～12月 活動実施

10/06(木) 栄小学校5年生自然体験学習
10/08(土) 太田ヶ谷の森整備
10/12, 18 逆木倉庫整備
10/16(日) 大谷川クリーン大作戦
10/19(水) アメリカザリガニ掃討講演会
10/23(日) 上広谷子供会里山体験活動支援
11/12(土) 五味ヶ谷市民の森里山体験会
11/19(土) 蜂の巣保育園秋まつり参加
11/19(土) 坂戸入西の森パーク応援
11/25(金) ベンチ製作プロジェクト
11/26(土) 太田ヶ谷の森整備
11/26(土) もろやま大類の森パーク応援
11/27(日) 運動公園落葉集め&焼き芋会
12/07(水) 五味ヶ谷市民の森整備
12/18(日) 太田ヶ谷の森整備
12/24(土) 坂戸入西の森門松教室協力
12/25(日) 家族で楽しむ門松教室

1月～3月 活動計画

01/11(水) 高倉市民の森整備
01/21(土) 木工教室
01/28(土) 太田ヶ谷の森整備
02/04(土) 五味ヶ谷市民の森整備
02/15(水) 小彼岸桜根巻作業
02/25(土) 太田ヶ谷の森整備
03/04(土) 木工教室
03/11(土) 藤金市民の森整備
スケジュールは雨などで変更が有るかも知れませんが、当クラブHPで確認下さい。

最近のトピックス

編集部

■市内各所にベンチを (ベンチ製作プロジェクト)

公園に行って一寸休憩する、お茶を飲む、お弁当を食べる時にあるととても助かるのがベンチです。私たちの活動の場としている、高倉の森、五味ヶ谷の森、藤金の森、そして太田ヶ谷の森にはベンチを置きました。作業の合間のお茶タイムや、お昼にはこのベンチが活躍しています。森に散策に来た方も腰かけてお喋りしている姿もよく見かけます。市では、市内各所に福祉ベンチを設置する計画で、私たちのクラブにも協力して欲しいとの要請が有りました。ベンチ造りは枯れ死した巨木の伐採から始まります。

■縄織い機で縄を織う(門松教室で使用する縄を織う)

会員が譲り受けた縄織い機が大活躍しています。合成樹脂が幅を利かす現代では藁製の縄はほとんど目にする事が無く「何に使うのですか」とまじめに質問する方もいます。日本経済が活発化した明治末期に佐賀県で発明されたと伝えられ、たちまち日本中の農家で、農閑期の子供の仕事として活躍しました。譲り受けた縄織い機は1962年(昭和37年)川越で製作されたものです。当クラブの里山体験会や蜂の巣保育園秋祭りでは子ども達や親たちが興味深く取り組んでいました。

■アメリカザリガニの大量繁殖(駆除作戦)

雑食性の強いアメリカザリガニが市内の大谷川の源流太田ヶ谷の森、飯盛川の源流高倉の森で大量増殖しています。駆除しても駆除しても直ぐに復活してしまいます。池や川の生態系を破壊し、土に潜って生息するので田の畔を崩したりする被害も報告されています。ホタルを復活する活動をしています、ホタルの幼虫や餌のカワナナも格好の食料にされてしまう状況です。

私たちは日々美味しく楽しく食事をしていますが、食卓に乗る食べ物は我が国では自給率37%です。多くを輸入に頼っている私たちの生活は、地球温暖化による自然災害の増加、ロシアとウクライナの戦争による影響など、地球上全ての地域での出来事と無関係とは言えなくなってきています。この事実をふまえ、緑地保全と「私たちに出来ることを伝えていこう」というのが、今回の目的でした。

具体的には、11月27日(日)朝、10時に運動公園に集合し、公園を埋め尽くしているコナラ、クヌギなどの枯葉をおよそ1時間半かけて袋詰めして隣接する会員の畑に運び込む作業をしました。作業の趣旨は清掃と言うよりは枯葉集めなので効率よく集められる場所を選び、風の力を利用して風下に向けてかき集めました。

畑には会員があらかじめサツマイモの焼き芋と、蒸かしたサトイモを用意していました。

畑の主の会員がハンマーモアという機械で除草してくれていて、そこに用意されていた畳表を思い思いに敷いての食べ放題の芋パーティとなりました。これでお昼のお腹は満喫でした。

「枯葉を集める事と芋を食べる事を結び付け太陽と大地の恵みを知り、この恵みが何時までも続くためには何をすべきかを感じてもらいたい」という想いが伝わり、参加してくれた人がいつか必要に迫られたときは、食料の確保のためにどうすれば良いかの体験として思い出してくれますように。

参加者と段取りをしてくれた会員の方々、本当にありがとうございました。



里山体験教室

栄小学校五年生の皆さん

■つるがしま里山サポートクラブの皆さんへ

今日は私たちのために3時間くらいいろいろと説明などをしていただきありがとうございました。今日、心にのこったことが2つあります。1つ目は竹細工をやったことです。私は太めの竹で教えてもらったコップを作りました。最初は竹がなかなか切れなくて苦戦していましたが、サポートクラブのかたが、「力を入れて切るより、軽く引いて切るといいよ」と教えてくれたのでやってみると、早く切ることができました。そのおかげで、作品を3つ作ることができました。2つ目は、木についてです。木は色々な役目をしていておどろきました。根から吸った水を放出して涼しくなるのがすごいなと思いました。3℃～4℃森の中の方がずっと涼しく、木の葉で太陽の光も遮られます。私はこの体験を通して植物をもっと大切にしようと思いました。木を植えたり、育てることで、地球温暖化もふせげると思います。これからも頑張ってください。(高山咲愛さん)

■里山サポートクラブの皆さんへ

いそがしい中でいろいろな事をやらせてくれてありがとうございました。いろんな事を知れてよかったです。知れたことの1つ目は道路の表面温度と森の気温の差についてです。行った時は雨だったからあんまり気温の差は感じなかったけど、晴れの日に行った時の気温の差も調べて感じてみたいです。竹を切ったことはなかったので竹でコップを作るのが楽しかったです。もっといろいろな物を作りたいと思いました。けん玉もやらせてもらって、入れるのがむずかしかったです。2つ目は木を増やして酸素を増やし、二酸化炭素を減らす事です。木を増やすことで酸素が増える事にビックリしました。こんなことが知れてよかったです。あと、はちのむさしが気になりました。でもとても楽しくて良かったです。ありがとうございました。(棚橋虹奈さん)

私たちの活動は市民の森の維持管理を基本に、里山の利活用、伝統文化の継承、多様な主体の参加・協働による自然の保全、自然の大切さを体験してもらいたい、活動を通じて地域の里山を保全し、人のつながり、住んでみたい地域づくりにつながっていくことを願っています。

里山を次世代の子ども達に残したいという思いは、会員の共通した考え方です。

市内で、自然が少なくなった中で育った方々に、身近な里山を体験してもらいたい。森の恵みが生き物を豊かにするという自然の循環の関係を理解し、生き物の源である植物・森を大切にってもらいたいと願っています。里山を保全していくことにより、地域の緑を豊かに、人のみならず生き物の生態系を維持していきたいと思っています。

自然との関わりの中で、子ども達は森の中の生き物、昆虫、樹木などに沢山の興味を持って、自ら調べてみてほしい。自ら調べ、質問、調べることにより、沢山の問題解決能力を育ててほしいと思っています。

このためには、子どもの頃から森の体験が大切と考えています。

NPO つるがしま里山サポートクラブの取り組みは、「地主さんの協力により市民に解放された森」市民の森を整備・管理する事により、市民の皆様が利用できるように取り組んでいます。

この市民の森の空間は多様な団体や世代の方々の自然体験のプラットフォームとして活用されることを目指し、市民の皆様の利用のきっかけづくりの活動として、各種自然体験、竹の子掘り、門松づくり、森の中の遊びなどのイベントを開催しています。

このような、市民の森で、多様な市民が共に自然の体験を通じて、地域の人々の繋がりなどにつながる事が大切と考えています。

子ども達の自然体験を目標としてとしては、次の様な取り組みをしています

① 次世代の子ども達の自然体験プログラム

森の維持で伐採、植樹に取り組んでいますが、植樹した木が大きくなるには20～30年位必要となります。私たちは、それを見ることは出来ないかも知れませんが、子ども達は、大人になって見ることが出来ます。大人になった皆さんがその子ども達に自分が植えた木などの話をしてくれるのを夢見ています。



② 保育園の園児の自然体験

0才から5才の保育園の子ども達は、25～35才の壮年となっているはずですが。幼いときの思い出となってほしいと思っています。

③ 小学校の総合学習としての自然体験活動

学校では自然の大切さ等を学ぶと思いますが、実際の森の体験経験は少ないと思います。このため、小学校と連携し、市民の森での自然体験学習に取り組んでいます。沢山のカブトムシ、森の材料を利用した工作、竹細工などの体験支援をしています。



④ 中学校の福祉教育への参加

中学校ともなると地域の課題に対し、何をしたら良いかなど福祉の視点の取り組みが始まります。高齢者や歩行に障害のある方々へのサポートとして、必要な場所にベンチを設置する等の活動に取り組んでいます。里山クラブは又、社会福祉協議会と連携して支援しています。

⑤ 子ども会の自然体験

地域の自治会、子供会などの皆さんと共に、自然体験をするイベントを開催し、地域の方々との多様な主体の参加による取り組みをしています。

⑥ 自然の材料を活用した、門松づくりなど

地域の伝統的行事として、地域の素材を活用したものづくりの一つとして、年末に「子ども達の門松づくり」を開催しています。また、春には竹林のタケノコ取りなど竹林の恵みの体験を開催しています。



前回の第9号「通信」で高倉市民の森内の飯盛川のゲンジホタルは絶滅の危機にあること、新規に取り組んでいる太田ヶ谷の森内の大谷川へのヘイケホタルの放虫も成果として表れていないことを報告しました。それらの理由について専門家等にも聞きましたが、理由が分かりませんでした。

今年の7月に当クラブは「太田ヶ谷の森里山体験会」を開催しましたが、そのイベントで森内の大谷川にいる水生生物を参加者に見てもらうため、「鶴ヶ島の自然を守る会」の皆さんが森内のビオトープ・大谷川にモンドリアミを仕掛けました。その結果、2日間で110匹のアメリカザリガニが捕獲できたとの報告がありました。

そこで、アメリカザリガニとホタルとの関係を調べたところ、アメリカザリガニの繁茂の影響でホタルの数が減少しているとの事例がありました。飯盛川・大谷川の土の土手にはアメリカザリガニの巣穴がたくさんあることは分かっていたのでこの生物の存在がホタルに影響している可能性が判明しました。

アメリカザリガニは子どもたちに人気の水生生物ですが、繁茂すると地域の水生環境に甚大な影響を及ぼすことから、環境庁はアメリカザリガニを「緊急対策外来種」に選定し、“野外に放さないでください”と注意を呼びかけ、繁茂しないよう指導しています。現在、全国の各地でアメリカザリガニ防除の取り組みが行われています。



既に蔓延地域となっている鶴ヶ島で今後、どのようにしていけばよいのか。まず取り組むべくステップは、アメリカザリガニの生態・実態を知ることが先決となるため、「鶴ヶ島の自然を守る会」の佐々木英世さんに依頼し、「アメリカザリガニ基調講演会」を10月19日(水)農村センターで開催しました。

講演会等で分かったことは、この生物は既に日本各地に蔓延しており、繁殖力が強く、根絶することは難しいことから、地域での個体数を減らすことが中心となること。6月に卵を産むので4月~6月に捕獲することが効果的であること。冬には冬眠すること。捕獲した後の処分方法が課題となること。等でした。



講演会の具体的講演内容については次回の第11号「通信」で詳しく報告します。



アメリカザリガニは既に冬眠しているかもしれないが、事前の体験として10月23日(日)高倉市民の森内飯盛川で捕獲作業を実施しました。昼にモンドリアミ8個を川に沈め、翌日に引き上げた結果、3匹を捕獲することができた。

来年の春から本格的な捕獲作業を実施する予定なので興味のある方は参加されますようお願いいたします。

場所は、高倉市民の森内の飯盛川、と太田ヶ谷の森内の大谷川です。
方法はモンドリアミに餌を入れ、川に沈め(沈めないとハクビシン等に網が破られ餌がとられてしまう。)、翌日引き揚げて捕獲することを継続する。

なお、大谷川の中流域にある藤金市民の森にホタルが出せないかとカワニナ・タニシを入れてきたが、育っていないので、川にいる大型の鯉に食べられているのだろうと考えていました。今回、鯉はアメリカザリガニの捕捉者であることが分かり、生物多様性の自然界の関係図は複雑であることを実感しています。

「市民の森」の始まり

監事 吉田 常男

私は、武蔵野の雑木林が好きです。新緑の時、冬枯れの木洩れ日、幼い時期から雑木林（森）を遊び場として育ってきました。心の原風景です。いまでは山の中に小屋を建てストーブの薪割を楽しんでいます。

鶴ヶ島の魅力として、多くの市民は緑の多いことを挙げています。残された樹林地を後世に残すための取り組みを望まれています。この様に生活する上で、市民要望として良好な環境の確保として、樹林の保全、緑の確保等が上位にありました。

こうしたことから当時、市では国の施策としての市民緑地制度を活用し樹林地の保全、緑の確保等を図る取り組みを始めました。

2001年（平成13年）10月頃から市民の森の指定に向け準備を始めてきました。指定に向け、樹林の調査、所有者交渉等を進め、2002年1月に第1号として太田ヶ谷の森を指定することができました。この森を育むため地域の方々により「市民の森に親しむ会」が発足し取り組みが始まりました。その後、高倉の森、五味ヶ谷の森、三ツ木の森と指定地を広げてきました。当時は森林ボランティア「市民の森サポート隊」として市民の参加をいただいて活動を進めてきました。この活動を進める中で2003年3月に現在の「つるがしま里山サポートクラブ」が発足しました。

このころ、全国における市民緑地制度の指定地として、鶴ヶ島市の「市民の森の指定」が全国1番として国の白書に取りあげられています。

また、この間、国の補助金を活用した「緑の実態調査」を「つるがしま里山サポートクラブ」の協力により行いました。市内全域の「緑の実態調査」は県内で行われた事例が無く東京都での調査を参考にしました。この調査で緑地の減少の実態が明らかになり、より一層の緑地の保全・確保の重要性が改めて認識されました。

樹林の確保等は重要な取り組みであり、これからも継続して市民の森を拡大していただきたいと考えます。これらの活動に取り組んでいる「つるがしま里山サポートクラブ」会員皆さまの役割は、市民に期待される貴重な存在です。日頃より樹林地確保等の重要性を認識され使命感を持って活動している会員皆さまの姿には頭が下がります。私も、「つるがしま里山サポートクラブ」の一員として微力ですが活動に参加してまいります。

老人と未来

理事 柳川 豊彦

私が里山サポートクラブに入会してはや4年、気楽に過ごせる里山の活動だと思っていたら最近行事も増え、参加人数も増えて、倉庫も増え個々の意見もさまざま、これからの活動についていけるか不安をおぼえるこの頃です。

北海道の美唄に暮らして18年、冬の雪の多さと石炭のストーブを懐かしくおもいだします。

それから43年間放射線技師として都内の病院に勤務していましたが、バブルと酒とギャンブルで都会の垢にどっぷりつかっていました。その間、鶴ヶ島に市民の森があることも知らず過ごしていました。

自治会の活動にも参加していましたが市民の森の話はきいたこともありませんでした。雨乞いの龍の竹も高倉の竹林から調達しています。

脚折地域に市民の森がないので関心がなかったのかもしれませんが。

退職して悠々自適の生活がまっているかと思いきや95歳の母親が認知症になり老々介護の生活に、自分も体のいたるところがさびつき介護も大変ですが森のエネルギーをもらいに里山の活動を続けていきたいとおもいます。



2022年9月19日に大森一史さんから里山サポートクラブ会員へ、長年捜していた縄織（な）い機（製縄機）が手に入った旨の一通のメールが届いた。皆様にはそれだけのことだったかもしれないが、筆者にはこのメールを見ただけで1950年代、いまから6、70年も前の小、中学生時代のことが一気に、しかもまざまざと思い出されたのである。



写真:大森さんが手に入れた縄織い(製縄)機。昭和37(1962)年製造とある。手前は藁(わら)などの縄の素材を差し込む「ウサギの耳穴」。奥の鼓(つづみ)形の部分は絞った縄の巻き取りドラム。大きさは幅0.5m、奥行き2m、高さ1mほど。

筆者は越中富山の山麓の、50戸ほどで米作中心の農家からなる貧村の、農地を7反分しか持たないもと小作だった農家の7人兄弟の3番目の次男として生まれ育った。こんな小農家の3世代11人の大家族だった(当時の我が村では別に珍しいことではなかった)ので農業だけでは食っていけず、父は地方の私鉄の電車の運転手をしながら農作業をしていた。当時はまだ機械化には程遠く、田植え、稲刈りはおろかほと

んどの農作業は手作業だったので子供の手も重宝で、どこの農家の子供も小学3年生から現場に駆り出された。山麓のせい、裸足で入る水田の水は5月でもとても冷たく、どの農作業もつらかったけれど、それが当たり前だと思っていたものである。

稲刈りと乾燥、脱穀、米の供出が終わるのは11月中旬のころであった。11月23日の勤労感謝の日を境に、それから翌年の3月末の村の春祭りまでの時期は世の中では農閑期とよばれ、春祭りが終わるとその年の稲作の作業が始まって農繁期に入る。しかし、当時の農家では農閑期は決して「閑」ではなかった。

当時の農家には入り口を入るとまず土間があり、そこにはもみに混じったもみ殻や藁くずなどを取り除く唐箕(とうみ)、むしろ織り機、草履やわらじ、菰(こも)を編む作業台などと一緒に縄織い機があった。当時は刈り取った稲を束ねるにも、俵やむしろを織るにも、草履やわらじを作るにもさまざまの太さの縄が必須であり、どんな小さな農家にも縄織い機は必ずあったものである。そして農閑期に入ると、俵作り、むしろ織り、草履やわらじ作り、荷縄などの太くて強い手作業による縄織いなどのほかに、比較的細めでほぼ万能の縄が縄織い機で絞られた。すなわち、農家では農作業に必要で、自分で作れそうなものはすべてこの農閑期に用意されたので、農閑期は決して「閑」ではなかったのである。

この農閑期でも子供が駆り出されたが、ほとんどの作業はそれなりの技能が必要で子供にはできなかった。しかし、縄織い機による縄織いだけはちょっと練習するとすぐにできるようになるので、格好の子供の仕事であった。農家には稲を刈り取って一つかみの藁束にして乾燥し脱穀したあとの藁束はいくらでもあったので、それをまず村の水車小屋で何束もまとめて打って柔らかくし、それを使って縄織い機で縄を絞るのである。水車小屋での仕事はさすがに子供には危なく、それは祖父の仕事であり、子供の仕事は縄織い機で縄を絞ることであった。ただ、農閑期は冬場であり、北陸の冬は寒くて農家の土間に暖房などあるわけもなく、手がかじかみ寒くてつらい仕事であった。(次号へ続く)

畳屋

畳屋さんには廃棄する畳表が沢山あって処分に困っていました。

原材料はイ草の外にナイロンの糸で出来ているので大量に溜ると市の清掃工場に持ち込み、有料で焼却処分となります。

まだまだ使える畳表を何か使える方法は無いかと考えた末に縄を作るに至り、インターネットで縄織りの動画を見て覚えると、これが基本（注連縄・正月飾り等）と判り注連縄作りの切っ掛けとなったのです。

注連縄（しめ縄）作り

里山サポートクラブの管理している五味ヶ谷の竹林は春には立派な筍の収穫や、竹を利用した容器・玩具を子ども達と一緒に作って楽しめる自然の恵みの宝庫です。

私の年代ではそれが当たり前の事でしたが、昨今は作ることや自然と遊ぶ事を知らない子ども達が殆どで、忘れかけた思い出を蘇らすために鋸や鉋の使い方、竹や木の性質を教える機会がここに有ります。



稲荷神社



御岳神社

竹林内には瀧島家の御嶽神社と稲荷神社が祀られ、私たちの安全な活動を見守ってくれる御礼に、ここ 3 年ほど暮れには注連縄を作って奉納しています。

注連縄を縛ると仲間が作った紙垂を取付ます。

細くても、太くても基本は縄を縛うのと同じ。

太くて長い注連縄は高倉の森の御神木用に 5m 位の長さになるので、この時は 3 方向の持ち手と指揮者のかけ声で注連縄を縛って行きます。

大きな声を出し、反時計方向にねじって 1 方向と 2 方向を時計方向に縋い、綱にしていきます。次に 3 方向目を反時計方向にねじりながら 1、2 方向の綱に時計方向に巻き付けて行きます。

大の大人が 4 人づつ 12 人、掛け声ばかりが勇ましい、へっぴり腰の注連縄作りを見て子ども達は、もっと上手にできる、と思わせるのが技術伝承の要諦なのです。

今年は 2 つの神社の外に宮城県の仙台門松を作ります。

見せるのも技術の伝承ですね。

編集後記

執筆者と読者のおかげで里山通信も 10 号に辿り着きました。感謝申し上げます。里山通信は会の活動を伝達するだけでなく情報発信の場として幅広く記事を書けるように心がけております。会の活動の広がりとともに様々の方や団体との輪が広がっています。この輪が幾重にもなるように皆様の想いを掲載してこれからも里山通信は大海原を漂っていくでしょう。奮って寄稿下さるようお願いしております。

ホームページ：<http://www.satoyamasupport.com/>